

平成 31 年度 前期日程 小論文「論述（長文理解）」
出題の意図と解答の傾向

【出題の意図】

西垣通『ネット社会の「正義」とは何か 集合知と新しい民主主義』（KADOKAWA、2014年）から出題した。高度化し細分化された「専門知」が、相互のつながりが見えにくくなったり一般常識からかけ離れたりして、現代社会の諸問題を解決するのに十分機能しない場合があることを踏まえて、筆者は専門知を補う新たな知のあり方として「アマチュアの知」の活用法を提唱し、現代の民主的な意思決定を活性化することを目指している。

本書では、人間集団の規模やまとまりの度合いに応じて価値の共有かまたは自由の確保かのいずれかが強調されることを前提に、安全性、幸福度、コストといった指標を組み合わせてさまざまな問題を解決するための討議と意思決定のモデルが提案されている。その際、多数の「アマチュア」が多様な観点から自由に意見を表明し、なおかつこれを一定レベルの専門知を備えたリーダーがうまく集約していけば、専門家だけによる意思決定よりも有効な結論が得られる場合があるとの見通しが示されている。このモデルを用いて死刑廃止、人体増強、監視社会、ボランティアの義務化などの具体的問題をめぐる議論の例が取り上げられている。一部専門用語が用いられていて難しいと思われるかもしれないが、文章は明快であり、現代の諸問題に公共哲学や情報理論（西垣氏が提唱する「基礎情報学」）の観点からアプローチする試みとして有益であると思われる。関心のある受験生諸君はぜひ手に取って読んでみてほしい。

本問題で使用したのは同書第一章の一部分である。設問 1 は、本文の前半部分を中心に「間主観性」というキーワードを用いて「客観世界」の出現プロセスを問い、設問 2 は、後半部分を中心に「専門知」に対する「アマチュアの知」の特徴をまとめたうえで、「アマチュアの知」の活用法について自分の考えを問うている。

＜設問 1＞

傍線部 (1) の問いかけ「いわゆる客観世界はいかにして出現したのだろうか」に対し、筆者は「間主観性」という概念を用いて答えている。「間主観性」とは何かを明らかにしながら、この問いかけへの筆者の答えを、わかりやすい表現を用いて 200 字以内で要約しなさい。

傍線部 (1) の問いかけ「⁽¹⁾いわゆる客観世界はいかにして出現したのだろうか」に対し、筆者は「間主観性」という概念を用いて答えている。⁽²⁾「間主観性」とは何かを明らかにしながら、この問いかけへの⁽³⁾筆者の答えを、わかりやすい表現を用いて 200 字以内で要約しなさい。

「サルやカラスなど、…」以下の 2 段落分の内容の要約問題である。ただし、文中の表現のたんなる抜き書きでは不十分。「客観世界」とはどのようなものを理解したうえで、「間主観性」の意味内容を「わかりやすい表現」を用いて説明して解答する。

ここで「客観世界」とは、人間が言語を用いて形成する、固有の秩序とルールをもつ共通の意味世界・価値世界のことである。感覚に根差し、一般に「客観的」認識の対象となる「自然」の世界とは区別して、人間が言語・理性に基づいて作り上げる「社会」として端的に理解してもよい。

人間は、言語を用いたコミュニケーションによって意味と価値のある共通世界を形成し、個々人の孤立した主観的な感覚の世界を越えて相手の感情を解釈し意思を伝達し合う。「間主観性」というのは、このように孤立した主観どうしを言語を用いて結びつけて共通の意味や価値の世界、すなわち社会を成り立たせることである。やがて人間はこの共通の意味世界や価値世界をそれ自体として自立するものであるかのように見なし、孤立した主観的な感覚の世界ではなく、固有の秩序とルールをもつ共通の意味世界・価値世界が実在しているなかで生きているかのような「共同幻想」を抱くようになる。以上が筆者の主張である。

解答は、(1)「客観世界」とは何であるか正確に理解できているか、(2)「間主観性」の意味内容を「わかりやすい表現」を用いて説明しているか、(3) 筆者の答えを的確にまとめているか、を基準として評価した。

(1)「客観世界」を人間が言語を用いて形成する、固有の秩序とルールをもつ共通の意味世界・価値世界、または端的に「社会」としてとらえていけば問題ないが、「客観世界」についての具体的説明がなく「客観世界」の語をそのまま用いている場合には減点した。

(2)「間主観性」の説明がたんなる抜き書き（「周囲の人びととの関係をつうじて、意味と価値のある世界を徐々に構成していくこと」「個々の人間は基本的には孤立した主観世界の住人であっても、そのなかに他者の主観性が導

入され、これにもとづいて世界が再解釈される」)であれば減点した。自分の言葉を適宜用いて意味内容を的確に理解しているかが問われている。

(3) とくに「言語を用いてつくり出した固有の意味世界・価値世界がそれ自体自立して客観的に存在するかのように見なされること」が理解できているかどうか重要な評価ポイントである。

本文中では、コミュニケーションの円滑化が意味世界・価値世界の自立の目的とされているのだが、この点には触れていなくても減点しなかった。

なお、言語を用いて意思疎通を行ったり共通の価値や規範を打ち立てたりする点に、人間の他の生物と比べた場合の特異な点があることは、誰も疑わないであろう。本文では、「意味や価値のある世界」がもともと「主観的なもの」であるが、この意味や価値が共有されて「客観世界」が成り立つとの見解が示されている。「主観世界」というのは赤ん坊の生理的に孤立した感覚や欲求の世界だとされているが、大人であっても趣味の領域を初め、世界の諸事物を意味づけたり価値づけたりする際には各自それぞれ異なる「主観世界」をもつのだという。要するに、人間の発達過程で主観世界から客観世界が生じてきて、客観世界が成立した後でもなお、主観世界がいわば一部残存している、という見解である。

だが、赤ん坊の生理的な意味での「主観性」と大人の趣味判断等における「主観性」とはそれぞれ分けて考えるべきであろう。そもそも赤ん坊は主観または「自我」の観念をもたない。発達過程で言語を習得することで、幼児は徐々にモノ(客観)を認識すると同時に自分自身(主観・自我)をも認識するようになる。言語使用によって客観と主観が区別されてくるのであり、このようにして出来上がった主観・自我が、あらためて「間主観性」を通じて意味と価値の世界、社会を「客観世界」として主観・自我から自立させるわけである。この場合、主観と客観の第一の区別における「客観」と、自立した主観同士が作り出す(本文では「共同幻想」と称されている)「客観世界」とは混同してはならない。本問の解答にあたってはこうした「客観」の二重性という問題にまで言及する必要はないが、この点を踏まえて解答しなさいという設問にしていたら直ちに難問となったであろう。

<設問2>

「専門知」に対する、傍線部(2)「アマチュアの知」の特徴について、筆者の見解をわか

りやすい表現を用いてまとめたうえで、社会のさまざまな問題を解決するための「アマチュアの知」の活用法について、あなたの考えを600字以内で述べなさい。

「専門知」に対する、傍線部(2)①「アマチュアの知」の特徴について、筆者の見解をわかりやすい表現を用いてまとめたうえで、②社会のさまざまな問題を解決するための「アマチュアの知」の活用法について、あなたの考えを600字以内で述べなさい。

文章全体の趣旨を踏まえて自分の考えを論理的に述べているかどうかを問う設問である。

本文3段落目以降で、筆者は知の二つの形態を挙げている。客観世界の解釈の普遍的な妥当性、ルール論理的整合性および機能の機械的効率性を高めていく「知識(knowledge)」と、個々の人間の身体活動と主観性に根ざして、生命活動の保存発展にたちもどる「知恵(wisdom)」である。この知の区別に基づいて、筆者は人類史の歩みを、循環型で種の保存に関しては大成功だったとする狩猟採集時代から、農耕牧畜社会、封建社会を経て、商品生産・商品交換を中心とする近代社会に至る過程で「知恵志向」から「知識志向」へと変化したととらえている。社会の分業と専門分化が進み、プロフェッショナルの知が重宝されるのが近代社会である。

専門分化の細かさや専門知識の量が膨大となり、社会全体について適切な判断を行うことのできるエリート知識人やエリート集団はもはや存在しない。そうしたなか、タコツボのように詳細かつ膨大となった専門知は硬直化し、東日本大震災時の原発事故収拾が迷走をたどったことで、専門知そのものの信頼性も低下した。

そこで筆者は、専門知の限界を補う手立てとして「アマチュアの知」に着目する。アマチュアは自由な発想や健全な常識をもち、個々の事柄についての型通りの知識にとらわれないで全体的観点から、しかも近代社会において軽視されるようになった素朴な身体感覚や主観性の観点から、生活をより安全に、より豊かにしようとする意見を表明するのである。

解答は、(1)「アマチュアの知」とはどのようなものなのか、筆者の見解をわかりやすい表現を用いてまとめているかどうか、(2)社会のさまざまな問題を解決するための「アマチュアの知」の活用法について、本文の主張に関連付けながら自分の考えを論理的に述べているかどうか、を基準として評価した。

(1) 「自由な発想や健全な常識」「全体的観点」「知恵志向」「身体や無意識からの判断や直観」「生命活動の活性化や安全性向上」など本文中の語を適宜用いてまとめていけば正答とした。

(2) 本文中で触れられている「都市、環境、医療、エネルギーなどの現実の大問題」のなかからいずれかについて具体的に触れるのが望ましいが、問題解決の方法に限定して論を進めてもよい。また、情報通信技術の活用法に触れることも必ずしも必要ではない。本文の趣旨に関連付けながら解決策を示しているかどうかに応じて採点者の判断で得点を付けた。受験生があらかじめ用意してきたと思われる、環境問題、エネルギー問題、情報通信技術等の問題についての解答で、本文の趣旨と関係のないもの（要するに「我田引水」）については大幅に減点した。

「アマチュアの知に頼るのはあまりにも心もとないので、むしろプロフェッショナルの知をもっと実効性のあるものにすべきだ」というような筆者への反論が展開されている場合、その論理的整合性や説得力に応じて適宜加点した。

【解答の傾向】

設問1、設問2いずれにも「わかりやすい表現を用いて」という条件を付している。傍線部の前後を読めば解答のヒントがすぐに読み取れるため、文脈を踏まえて自分なりに内容を咀嚼し、自分の言葉でまとめることを期待したが、時間の制約もあったのか、要約問題については解答の大半が本文の抜き書きにとどまった。要約問題で自分の言葉でまとめた場合にも、筆者の考えではなく自分自身の見解を述べたものもわずかだがあった。「主観」とか「客観」について「主観を交えず客観的に意見を述べられるように工夫しなさい」というような指導(?)に引きずられたのか、「客観世界」を「主観的な見方を克服してみんなと共通の尺度で考えることができるようにすること」などと理解している答案もあった。一概に誤りとも言えないが、本文の筆者の見解からはズレてしまっている。

設問2で自分の考えをまとめる際、あらかじめ用意してきた話題を無理やり結び付ける答案が少なからずあった。あらかじめ用意してきた話題であっても本文の趣旨と関連付けられていけばよいが、そうでない場合には大幅に減点となるので注意してほしい。また、本文要約が大半を占める答案、逆に要約がほんのわずかであるとはほとんど自説という答案もあった。多くの答案を読む採点者としては、こうした「バランスを欠いた答案」の評価はどうしても低く

なることを認識しておいてほしい。本設問の場合、分量だけで言えば、要約3割、自説7割が目安となる。

以下、各設問について受験生の答案例で目についたものをいくつか紹介しておきたい。

<設問1>

「間主観性」の説明にあたって次のように説明する答案があった。「本来、意味とか価値などは主観的な存在である。…個別の主観世界の集合の中で、どのように客観世界が出現したのかということ、社会には他者が存在する。そこでは言語コミュニケーションを用いるため、必然的に他者の主観が自身にとっては客観となるため、客観世界が存在する。」本文の該当箇所では明確には述べられていない「他者」の問題に触れた答案である。「間主観性」を文字通りとらえれば「主観と主観の間」であり、ある主観にとって別の主観（他者）は当然「客観」となりうる。「客観」である相手同士を一つにまとめ上げて「他者の集合体」のような形で「客観世界」が成り立つ、このように言えなくもないだろう。けれども、「他者」は事物と同じような意味で「客観」であるわけではない。事物や道具手段のようにたんなる「客観的」な認識や働きかけの対象ではなく、自分自身と同様に、それ自身独立し、事物に対して固有の意味づけ、価値づけを行うのが「他者」すなわち「他の主観」（「他我」とも称される存在）なのである。互いに独立した主観同士が共通の意味世界、価値世界をどうやって構築していくか、ということがここで問われているのであり、この問題はただ単に「他者は自分にとって客観だから、そこから客観世界が生じる」というように単純に解決されるわけではないことに注意してほしい。

要約にあたっては原則として該当箇所をもれなくまとめる必要があるが、本設問では該当する2段落のうち後の方（「そうすると次第に、…」以下の段落）を見落としている答案が多数あった。「言語を用いて作り出した固有の意味世界・価値世界がそれ自体自立して客観的に存在するかのように見なされること」（上記「出題の意図」(3)）について指摘していない答案は不十分である。

また抽象用語の説明にあたって注意すべきことは、「同語反復」を行わない、ということである。「客観世界がいかにして出現したのか」という問いに対する答えとして「客観世界が存在しているという共同幻想を抱くことによって〔客観世界が〕成立する」と書いている答案が多数あった。これでは「客観世界が存在しているから客観世界が成立する」と答えているに

等しい。本設問の場合、「客観世界」とは何であるか、別の言葉で明らかにしてからでないと十分な解答とはならない。

＜設問 2＞

専門知は共通の解釈が成り立ち硬直したものの、アマチュアの知は多面的で柔軟なもの、と簡潔にまとめたうえで、多くの専門家を擁する企業ではなく、一般人である主婦のアイデアが新商品の開発につながるケースがあるという事例をうまく織り交ぜている答案があった。同じ方向の解答として、ボランティア参加者が経験からさまざまな「知恵」を手にし、これを集約し体系化することで、さまざまな分野に応用可能な「知識」となることを指摘している答案もあった（最近の例として、ボランティア経験豊富な男性が、「子供は上へ登る習性がある」という経験知に基づいて山で遭難した子供の救出に成功した事例を挙げた答案、また老人ホームや不登校児童とのコミュニケーションにおいてボランティアや不登校経験者が入るとうまくいくケースがあることを指摘している答案など）。

「一般人は多くのものを広い視点で見ている。…もしかすると専門家よりも多くのことを知っているのかもしれない」「全人類の『主観』つまりアマチュア知を総合すれば、専門知にも匹敵する、またはそれを超える強力な『セミプロ』の知となるのではないか」との答案もあった。本文の筆者も注目している「集合知」にもつながる見解である。

専門知とアマチュア知との「媒介」が必要だとする答案もあった。経済や景気についての直観や実感に基づく日常会話と、経済の専門家の用いる用語や論理がかけはなれているのでそれらを媒介することが必要であるとの主張や、ハザードマップ作製にあたって実際に住んでいる住民の実感を反映させ、校外学習などの機会も活用して児童生徒の目線も取り入れ、より詳細かつ確実なマップとすべきだという提案もあった。

アマチュア知はあてにならないので専門知の改善にこそ期待すべきだ、という答案もあってほしかったが、こうした論を展開した答案はごくわずかであった。近いものとして、小学校の「総合的学習の時間」とか大学の「総合政策学部」のように「総合」の名の付く教育の機会が多くなっているが、これらはある分野の知識をもとにして、他の分野に応用するためのスキルがなければ機能しないと主張する答案があった。この受験生は設問の問いを「多くの分野の専門知を集めた場で知恵志向のアマチュア知をいかに活かせるか」という問いに置き換え、

「大統領になるためにはどの知識がどの引き出しに入っているのか知っていなければならない」と結んでいた。アマチュアの知のあるべき姿を示唆したものと言えよう。

頻繁に見られた答案として、インターネット、SNS を活用して問題解決すべきだ、との主張があった。素人の方が専門家よりもものの見方が広いので問題解決に有効であると、根拠や事例の支えなしで主張する答案も少なくなかった。上記の「[アマチュアは]もしかすると専門家よりも多くのことを知っているのかもしれない」とも共通する見解だが、本文をしっかりと読めば「専門家よりもアマチュアの方が優れている」などという短絡的な結論には至らないはずである。また特定の情報通信手段や AI などを活用すれば万事解決する、などとも主張されていない。問題は、定型的な専門知と多面的なアマチュア知とがどのように関連付けられるかであって、いずれが優れているか、いずれが有効か、ではない。「もしかすると専門家よりも多くのことを知っているのかもしれない」アマチュアの知を活かすためには、一定の専門知を有し専門家とアマチュアとの間を媒介する役割を担う人（リーダーや「ミドルマネジャー」と呼ばれる立場の人）が必要である。多様な観点からの自由な意見と既定の体系化された専門知とを結びつけるのが、本文筆者の言う「ネット集合知」であり、集合知をとりまとめるためには専門知が不可欠なのである。

また、市民、住民をアマチュアに、市議会議員や市職員を専門家に置き換え、住民目線の市政を実現するために互いの意思疎通を緊密にすべきだ、という意見も多く見られた。市政レベルであればそもそも市議会議員をボランティアや輪番制にすべきだというアイデアもあるわけで、「職業としての政治家」は必要不可欠ではないのかもしれない。SNS 等を用いて、若者の意見も含め、民意をうまく市政に取り入れる方法を考える余地があるだろう。

さらに、事件が発生・発覚してから初めて対策をとるのではなく、児童虐待などを未然に防ぐために、また防災・減災対策としてアマチュアの知を活かすべきだ、との主張もあった。これまでに述べてきたことからアマチュア知の有効性が発揮できる場面だと考えられるが、具体策がほしいところである。